

レファレンス
余 話

「天正11年の銀1万貫というのは、今の
お金にするといくらぐらいか。」とか、「文
政11年の北方への出張費に、“調役者1日
銀3匁づつ”とあるが、現在の価格にした
らいくらぐらいか。」といった類の質問を
よく受ける。物語や歴史上の事件にててく
る貨幣の価値を実感としてつかみたいとい
うことであったり、当時の経済活動を現在
と比較してみたいということであったり、
意図はさまざまである。

当時の価格を厳密に現在の価格に換算す
ることは無理なので、だいたいの目安が得
られるように、資料を提供し、換算の手順
を示すわけだが、これがなかなか大変なの
である。

換算の基準には、普通米価を用いる。最
初の質問についていえば、米の1石あたり
の銀による価格を得て、つぎに銀1万貫に
よって求められる米の石数をだし、それに
現在の米価をかければ、だいたいの額は算
出できる。この時期については、二次デー
タ集として、『15~17世紀における物価変
動の研究』（京都大学 近世物価史 研究会編
読史会 1962年）があって、算出のベース
になる米1石あたりの価格が「銀15.4匁、
京都」と表示されている。出典は『妙心寺
文書』で、前後の年次の他の出典のデータ
と比較してみ、信頼できるデータとして
使うことができそうである。

次の質問については、『近世後期におけ
る主要物価の動態』（三井文庫編 日本学
術振興会 1952年）によって、ベースにな
るデータとして、「白米1石につき、江戸
春65.5銀匁、江戸秋83.1銀匁」を得るこ
とができる。

このほか、よく用いられる二次データ集
としては、周知のように、『近世大阪の物
価と利子』、『日本米価変動史』、『読史総覧』
所収の「中世物価表」や「近世相場一覧」
等がある。このような集大成された二次デー
タ集に、必要なデータが収録されていれ
ばいいのだが、時期や地域によっては、デー
タが得られないことがある。そうなると
関係の著書や論文にあたってみなくてはな
らない。日本経済史における物価史研究は
近年さかんで、基礎になるデータの収集、
整備が進められつつある。また、日本経済
史は書誌情報の豊かな分野なので、あたっ
てみるべき著作も少くはない。

データ探しと共に苦勞するのは、明治以
前の幣制の複雑さである。一応の統一をみ
た江戸時代についてみても、金、銀、銭の
三貨が流通しており、現在と比べて理解し
にくいことに、この三貨は性格も単位も異
なっている。金は計数貨幣で、単位が兩、
分、朱で4進法、銀は秤量貨幣で、単位が
匁、分、厘で10進法、銭はまた計数貨幣
で、単位は文、1,000文を1貫文と表示し
ていた。これら三貨の間には公定レートと
して、慶長期に、金1兩=銀50匁=銭（鏰
銭）4貫文と定められ、元禄期に、金1兩
=銀60匁と改められたが、現実には、時
代、地域によって変動していた。さらに、
銭貨には善銭と悪銭があり、両者のレート
は1/2~1/10 ぐらいの変動があった。西国
の銀づかい、東国の金づかいの問題もある。
もっとも基本的なことでさえこういふ実情
である。1兩を5、6万円ぐらいとみて簡単
に答えてすませられる場合もあるが、ケー
スによっては、複雑な単位間の換算も必要
である。

（47ページへ続く）

ンス・ツールとして、Oceana から、1970年
から1974年の間をうめる索引 (*Vambery,
Joseph R. & Vambery, Rose V. Cumu-
lative list and index of treaties and in-
ternational agreements: Registered or
filed and recorded with the Secretariat
of the United Nations. Dec. 1969-Dec.
1974. 2 v. 1977.) が出版されている。その
後は前にあげた条約及び国際協定説明書の
年毎の索引を用いばよい。

条約課は、内部で利用するために国連条
約情報システム (SIONUT) を開発した。

9. このシステムによる電算化は、国際協

定に関するあらゆるデータ (本文そのもの
を除く) の蓄積と整理をやりやすくしてい
る。この SIONUT はニューヨークの本部
にある国連の IBM 電算機と結ばれてい
る。外部の潜在利用者がこのシステムを利
用するのはまだむづかしい。しかし、1979
年に始まったプログラムの変更で、数年の
内には、IBM の端末によって外部からの
要求に応じられるようになるだろう。そう
なれば各国政府や他の国際諸機関がごと
く直接情報を交換することも可能になる。

(はまむら・さよこ

東京大学附属図書館)

(51ページより続く)

さて、幣制が整備された明治以降になっ
ても難題なのは、外国通貨がいくらぐらい
だったかということである。主要国につい
ては、総合統計書の類に、外国為替相場が収
録されているからいいとして、それ以外の
国についてはデータが乏しくて苦勞する。
大蔵省告示の「外国貨幣日本銀貨比較表」
をまとめたデータが「内外貨幣度量衡比較

表」として、『通商彙纂』等に収録されて
いる。ただし、これも時期や国に限られて
いる。

いずれにしても、古いお金の価値を問う
レファレンスは、容易に答えられそうにみ
えながら、その都度異なるむづかしさがあ
る。

(経済社会課 相馬民子)